

第二のレベルとして、方便法身としての阿弥陀如来という考え方が、プラグマティックである。顕明は、「尺（釈）尊等の大師の教示に依て理想世界を欲望し、救世主たる弥陀の呼び聲を聞くと」言うが、釈迦もまた、超人として神格化された仏陀ではなく、他の大師と同列の同志扱いなのである。一方、方便法身とは、私たちの間に確かにあるとしか言いようのない平和と平等への希望を説明するために、説明の手立て（方便）として立てられたものにすぎない。私たちは、この方便法身に対してだけ信徒の態度を取ることによって、教祖を含む具体的な他人を主として追従することや、何にも希望を持たないような二ヒリズムからまぬがれることができるのである。方便法身、報身という概念を徹底すれば、歴史上の釈迦は、まさに釈迦その人の時代にそうであった、「以前にも多数出現してきた、またこれから出現すべき無数の仏陀（目覚めた人）の一人」という本来の位置にもどり、釈迦もまた超越的存在ではなく、私たちを励ます先輩にすぎなくなる。ただし、このレベルにおいても、方便法身という「真理」が他の現実的な真理との関係で十分に有効とまでは言えない。

第三のレベルとして、往還二廻向の考え方が、プラグマティズムである。仏教の目標は、自ら苦悩の解決者となって他の人びとの苦悩の解決を助ける者になることである。前者を「自利」、後者を「利他」という。浄土教においては、自利は自らの往生浄土、利他は還来穢国して利他教化することであり、それぞれ往相と還相とも言う。浄土へ往くということが現実になんていう意味であるかということ、その平和と平等をどのよう

他者に伝えるのが明らかでなければ、プラグマティックに有効な真理とはいえない。それを明らかにするのが往相還相の双方が同時に阿弥陀如来から廻向されるという考え方である。行者が実際に言うことは、「南無阿弥陀仏を唱える」ということにすぎないが、それが本人の意思にかかわらず、自利と利他、往相と還相を実現してしまうのである。このレベルにおいて、ついに、専修念仏は現実の社会において有効な真理となる。

顕明は、「斯の如くして念佛に意義のあらん限り心零上より進で社会制度を根本的に一変するのが余が確信したる社会主義である」と言う。

妙好人浅原才市における「入信」に至る 心的過程に関する一考察

中尾 将 大

浄土真宗における在家の篤信者のことを妙好人（みょうこうにん）とよぶ。これまで日本各地に多くの妙好人が出現している。それぞれの妙好人は個性を持っていたが、「真宗のご法義をありがたがり、仏智との出会いを果たし、この世の価値観を超越して真に幸福な人生を歩んだ」という点においては共通している。本発表ではその一人、浅原才市（一八五〇—一九三二）を取り上げる。浅原才市について、藤能成は「島根県瀬摩郡温泉津町に暮らした下駄職人であり、寺院での熱心な聴聞、日々の念仏の生活を送った。下駄作りの仕事をしながら胸の奥

から自然に溢れて出る思いを、鉋屑や下駄のはぎれに筆で書き留めていった。これを「口あい」と呼ぶ。安楽寺の住職の願いによって、それらの言葉をノートに書き写すようになり、そのノートを通して、才市の篤い信仰心、深い精神性が世に知られていったのである。そこには、自己中心を超えて、見えない働きとしての阿弥陀如来の本願力に導かれて生きる才市の心境が、余すところなく表現されている」と述べ、浅原才市を「仏と対話する静寂の詩人」と表現している。鈴木大拙は浅原才市をして、「実に妙好人中の妙好人である」と絶賛している。これまで浅原才市に関する研究が多くなされてきたが、獲信に至るまでの過程についてはほとんど研究例が無い。また、吾勝常行は「妙好人伝」の群像が信前(入信過程)よりも信後の生活に重点を置いて語られていることを指摘している。そこで、本研究では、才市の入信に至るまでの心理的過程について考察を加えることを主たる目的とした。才市の辿った精神的階梯を明らかにすることによって、「人間としてあるべき生き方の実例」を、多くの方にお示しできたらと願うものである。浅原才市の入信までの過程に関する情報は数少ないが、楠恭による手記「寺本慧達氏を訪う」に詳しい記述が見受けられる。そこで、楠の手記を元に入信に至るまでの才市の心理的変化・行動の変化を辿ることとした。その結果、以下に示す心的過程の概略が浮かび上がった。①追い込まれ、己の「愚かさ」と向き合うことを余儀なくされる(巡査による説教)、②己を見つめる(自分の内面に注意を向ける)、③「愚かさ」を抑え、真人間になることを望む(これではいかぬ、人間にならねばならぬ)、④

その方法として仏法にたよる、⑤「なんぼ聞いてもわかりませなんだ」。⑤の段階では、頭で考えて(知性・理性で)仏法を理解しようとしていた。よって「慧」と出会うことは出来ず、己の「愚かさ」を抑えることが出来なかった。才市の内面において、「愚かな自己」対「真人間になりたい自己」または「仏の救いを求める自己」という葛藤状態が続いた(三十四・五年)。そして、⑥五十歳を過ぎになっていつとはなしに仏智と大悲の不思議が知れてきたらしい。この段階に至って仏法を感覚的・直観的に理解した。つまり、「慧」と出会ったのである。才市は煩惱具足の身に、阿弥陀如来から仏心(信心)をいただき、「愚かな自己」の働きの抑えられていったのではないだろうか。そして、仕事にも精が出るようになった。仕事は才市にとっての衆生済度とみられていた。浄土真宗の開祖、親鸞聖人は衆生が信心を得て現生正定聚(現生において、仏となる身に定まること、往生を約束された身)となることは「如来の促し」である(如来の回向による)としていた。罪惡深重の凡夫が如来の光(本願の働き)に照らされて自身の罪業の深さ(機の深信)を知ることが、同時に阿弥陀如来の救いの働きの確かさ(法の深信)が知られることである(機・法二種の深信)。才市の内面的変化から、親鸞聖人の説く「信の深まり」を見ることが出来るのではないだろうか。さらに、才市が辿った道を踏襲することで、現代人も物質的豊かさを越えた精神的豊かさへと到達できる可能性があるのではないか。(本研究は藤能成龍谷大学教授との共同研究である)。